

審査結果の要旨

審査対象者 田久保 由美子

小児期の肥満は高頻度に成人肥満へ移行し、健康障害の要因となる。国内の小児肥満の頻度は低下傾向にあるが、未だ多くの肥満児が存在し、臨床的には重度の肥満は増えていると言われている。そのため、小児期に肥満を持つ子どもと家族が肥満を改善する健康行動を促進するための介入プログラムを検討することは、重要である。

本論文は、「健康障害につながる肥満を持つ学童期の子どもと家族を対象とした介入プログラムに必要な要素と看護師の役割の探求」について SSM(Soft System Methodology)を用いた成果から検討した研究である。SSM は、立場が異なり、見方や考え方が異なる人々で組織される状況において、問題的存在であると知覚される状況に焦点を当て、その状況において改善と思われることを引き出す探索プロセスである。審査対象者は、かねてから小児期の肥満に着目し、多職種と協働して組織的にこの問題に取り組んできた。小児期の肥満の改善には子どものみならず家族全体のライフスタイルの修正が推奨されているが、その成果を導く介入方法は、未だ手探り状況にあり、研究も実践報告に止まっている。そのため、成果を導く介入プログラムの検討に向けて本研究に取り組んだ。

本研究においては、審査対象者が参加している「Aクラブによる肥満児童への介入プログラム」をケースとし、混んとしている活動を SSM 方法論に基づき整理するプロセスにおいて、介入プログラムに必要な要素である「医療者が介入を通して気づいた課題」、「子どもの肥満改善に影響する重要な要素」を具体的に抽出し、多職種による協働組織における「看護師の役割」を明確化している。他職種との協働による組織的取り組みを SSM という新たな方略を用いて理論的に検討した点において、先駆的研究として評価される。また、SSM を用いた問題解決プロセスを通し、看護の視点から介入プログラムに必要な要素を抽出したことは、肥満を持つ学童期の子どもと家族に対する肥満改善に向けた介入アプローチを検討する上で有益であり、小児看護領域の看護実践及び看護研究の発展に貢献するものと評価する。今後、他職種との協働組織による医療提供は増加すると思われ、本研究において組織活動における問題解決プロセスを提示したことは、小児看護領域に止まらず、看護領域全般における先駆的研究として評価される。

以上より、本研究は、肥満を持つ学童期の子どもと家族に対し、肥満を改善する健康行動促進に向けた組織的取り組みの在り方を提供する論文として高い価値を持つことが評価された。しかし、予備審査時に指摘された SSM 方法論を用いた研究プロセスの表現が不十分であり、独自性が明確になるよう論文の構成と表現を整理することが課題として残された。今後期待されることは、本研究の成果を概念モデル化することによって示される独自性のある発見を小児看護分野における新たな知識として提供することである。

学位審査委員会では、小児看護学の実践向上に意義を有し、看護研究の発展に寄与すると評価することから、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと認める。